

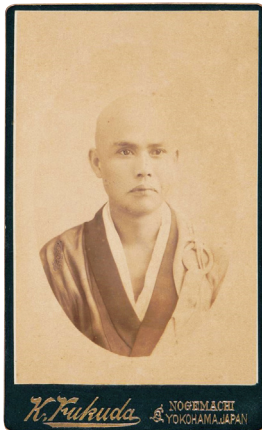
福沢研究センター通信

Newsletter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

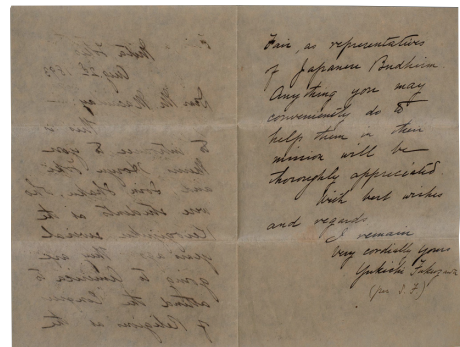
第28号 2018年4月30日 発行

目次

- | | |
|---|-----------------------------------|
| * 2017 年度福沢研究センターシンポジウム
「東アジアの近代とアメリカ留学」
(高木不二・阿部珠理)…………… 2・3・4・5 | * 新収資料紹介…………… 8・9 |
| * 特別展「釈宗演と近代日本」開催に当たって …… 6 | * 主な動き…………… 10 |
| * 福沢諭吉と韓国近代文学者、崔南善と李光洙
(宋恵敬)…………… 7・8 | * センター諸記録(2017年10月～2018年3月) …… 11 |
| | * スタッフ一覧…………… 12 |



福沢に贈られた釈宗演の写真(当センター蔵)



今回発見された英文福沢書簡
(筆跡は福沢捨次郎、東慶寺蔵)

釈宗演と福沢諭吉

釈宗演(1860-1919)は、慶應義塾出身者中でひととき異彩を放つ人物の一人である。入学は明治18年、26歳5か月の時。すでに臨済宗円覚寺派管長今北洪川の下で印可を得て、円覚寺塔頭の住職となっていた宗演は、師の反対を振り切って三田の寄宿生となり2年ほど英学を学び、次いで3年間セイロンで極貧の留学生生活を経験した。そして明治25年には円覚寺派管長に就任。翌年には世界の宗教家を一堂に集めてシカゴで開催された万国宗教会議に日本仏教代表として参加。これを機として米国人との親交を広げ、ZENの普及に力を注いだ。

福沢と釈の関係は一見深くなさそうだが、「釈宗演と近代日本」展開催(6頁参照)準備のための資料調査によって、宗演がシカゴに赴いた際に携えた英文の福沢書簡が発見された。書簡は福沢と親交の深かったユニテリアン宣教師クレイ・マッコーレー宛で、釈宗演と、同じくシカゴに赴いた慶應義塾出身の土宜法龍(後の高野山真言宗管長)の2名の紹介状である(1893年8月2日付)。改めて福沢家の金銭出納帳を見直すと、宗演と法龍に対して福沢が30円を贈った記述(同年7月25日)も見出される。宗教には無関心と見なされる福沢が、万国宗教会議という希有な試みに赴く門下生に対して積極的に便宜を図ったことは、晩年の世界観を語った『福翁百話』執筆や、独立自主を柱にした道徳律「修身要領」の編纂、宗教に言及した『福翁自伝』の末尾などを想起させ、大いに興味を抱かせる。(都倉)

2017 年度 福沢研究センターシンポジウム 「東アジアの近代とアメリカ留学」

■ シンポジウムを振り返って

高 木 不 二

(大妻女子大学短期大学部名誉教授・福沢研究センター客員所員)



2017年10月20・21日の両日にわたって慶應義塾大学三田キャンパスにおいて慶應義塾福沢研究センター主催のシンポジウム「東アジアの近代とアメリカ留学」が開催された。大学や学会などいろいろな行事予定の多い時期で、しかも台風がせまっているという悪条件のなか、多くの参加者を得て、活発で有意義な議論が行われた。

シンポジウムの企画は、日本・中国・韓国からの初期のアメリカ留学生の軌跡をたどることで、アジアの近代化にともなう問題をさぐってみたいというものであったが、アメリカをふくめ4カ国にわたる報告と討論は問題点が散漫になることが予想された。そこで高木をふくめた主催者側としてはワークショップを重ねつつ企画段階で、日本・中国(清)・韓国(李氏朝鮮)からそれぞれ初期段階でアメリカに留学した学生を二名選んで、その軌跡を報告してもらい、具体的な事実をもとに議論を行えるように配慮した。そのときに留意してもらった項目も細かく列挙し(例えば出身地、身分、留学に至った経緯および目的、官費・私費留学の区別、留学先・留学期間、学位取得の有無、アメリカでの修学状況、交友関係、帰国後の職業・業績、キリスト教・教会との関係など)、議論がかみ合うように配慮し、各報告者に準備をお願いした。またアメリカ側を代表して、ニュージャージー州立ラトガース大学のファーナンダ先生に基調講演をお願いし、受け入れ側からみた日本人留学生全般に関する問題点を指摘していただいた。

基調講演に先立ち、コメンテーターの立教大学阿部珠理先生からアメリカが初期の日本人の留学先として一番多かったこと、なかでもラトガース大学には最も多くの日本人が学んだ事実を紹介していただいた。

ファーナンダ先生の基調講演は、ラトガースカレッジやラトガースカレッジ・グラマースクールがあったニュージャージー州のニューブランズウィックが、当初日本人留学生の主要留学先となり、そこでの



Fernanda Perrone 氏

オランダ改革派教会の受け入れ人脈が日本人留学生のアメリカにおけるハブ・ネットワークとして機能し、ここから彼らの多くがアメリカ各地に散っていったことを指摘する内容で、大いに啓発されるところがあった。

二日目は、まず高木が日本人として最初の国費留学生の一人である熊本の横井左平太の経歴と、彼に続いてラトガースカレッジ・グラマースクールに学んだ同郷の津田静一について報告した。横井は後にメリーランド州アナポリスの海軍兵学校やワシントンD.C.のコロンビアカレッジに学び、帰国後は元老院権少書記官に任じられていること、一方の津田はやがてマサチューセッツ州のモンソンアカデミーさらにはコネティカット州ニューヘブンのイエール大学に学び、帰国後は一時北京公使館書記官見習いとなるが、後にはアジアへの関心を強め、民間の教育界などで活躍していることを報告した。共通点は二人とも熊本出身の武士であることと、軍事(横井は海軍、津田は陸軍)について学ぶ事を志していたが、留学先の卒業資格などは得ていないにもかかわらず、帰国後は官職を得ていることである。

ついで亜細亜大学の容應莢先生から、中国清朝のもとで留学生として最初にアメリカに渡り、イエール大学を卒業して帰国した容閔と、彼の提案によって組織されたアメリカ留学生グループ(第二次留美幼童)の一員として渡米し、イエール大学などで学び、帰国後に精華大学の前身にあたる精華学校の校長になる唐國安について報



左から高木氏、容氏、崔氏、西沢（司会）

告がなされた。二人の共通点はともに広東省出身の農民で、渡米後はかなりの英語力と最新の知識を身につけていたはずであるが、帰国後の就職先は保障されておらず、商人や通訳などを経たのち、地方に根をはる有力な洋務派官僚に仕えて初めて居場所を確保していることである。

最後に高麗大学の崔徳壽先生から、李氏朝鮮王朝末期に日本を経由して最初の朝鮮人アメリカ留学生としてマサチューセッツ州ダマースアカデミーに学んだ兪吉濬（ユ・ギルチュン）と、甲申政変によりアメリカに亡命し、コロンビアンカレッジやペンシルバニア大学医学校などに学び、実業家のち医師として活躍しつつ韓国親友会を結成して米韓の架け橋となった徐載弼（ソ・ジェビル）について報告があった。二人の共通点はともに両班出身で、日本（慶應義塾）に留学経験があり、故国の近代化に貢献するも、政変に遭って海外（ユは日本に、ソはアメリカ）で亡命生活を送っている点である。

最初の中国容閔のアメリカ留学（1847）から最後の朝鮮徐載弼のアメリカ留学（1885）まで約40年の時間のずれがあり、そこに世界情勢の変化を勘案する必要があることはいうまでもないが、その時差を加味したとしても、各国の留学生をめぐる近代化の特徴はそれぞれの報告と討論の中から浮かび上がってきたように思う。

日本の場合について言えば、ウエスタン・インパクトにすばやく反応して官民上下大きく離反することなく維新変革をなしとげ、新政府のもとで一貫して近代化政策が推進され、留学生も厚遇された事実の特筆されるべきであろう。そしてその反応が武士を中心として軍事面を強く意識したところに発していることも明らかである。しかしそれがそのまま後年の軍国主義路線の伏線になったとみなすことには慎重でありたい。それは高木が報告した次のような事例が存在するからである。津田静一はアメリカでの留学経験をもとに、イギリスなど侵略性の

強いヨーロッパ勢力に対し、侵略性のみられないアメリカと、人倫を重視するアジア諸国連合が東西協力して軍事的にこれを牽制し、その上で「天地の公道」に従って世界平和の実現を図ってはどうかと提案しているのである。単なるバランス・オブ・パワーの世界観を越える新たな道の探索は、近代化の過程でも官民を問わずたゆみなく続けられていたのである。ちなみに津田の説くアジア諸国連合が、対等な国家同士の連合体として考えられていたところも見逃すことはできない。

また討論のなかで、なぜアメリカ側が熱心に日本の留学生を受け入れたのかという疑問が提起されたが、これについては当時南北戦争を終えたばかりのアメリカが経済発展の道に進もうとする時期で、大学にも従来の聖職者養成機関という役割を脱して開かれた大学に向けた改革が求められており、学生を積極的に集めようという動きが顕在化していたという事情が背景にあったからではないかという指摘がなされた。受け入れはキリスト教布教のためであるというようなステレオタイプの見方ではなく、「偉大な学長の時代」とも呼ばれるこの時期のアメリカの大学の実情を歴史的にとらえた上で留学生研究もなされるべきことを議論のなかで教えられ、個人的にも有意義なシンポジウムとなった。

■ 日下部太郎 断章

阿 部 珠 理
(立教大学部名誉教授)



記憶のウェブの引っ掛かり、忘れられない人がいる。日下部太郎は、私にとってそういう人だった。30年以上前、私はたまたま江藤淳氏の講演会に行った。その日の氏の演題は覚えていないが、氏の話に出てきた幕末・明治の日本人留学生の生きざまが、私に強烈な印象を残した。

その留学生は、習得すべく膨大な先進知識を前に、一

日も早くそれらを自分のものにしようと、寝食を忘れて勉学に没頭し、言葉のハンデがあるにも拘わらず学年首席となった。だが、その結果、彼は健康を害し、25歳の若さでアメリカで亡くなった。江藤氏の言葉を借りれば、彼の死は、勉学に殉じた、いわば「勉強死」とも言えるもので、あたかもロウソクを両端から燃やすように、彼の命は尽きたのだった。

幕末・明治の世界は、欧米列強による植民地主義が頂点を極めた時期であった。世界地図は、ほとんど西欧色に塗りつぶされ、鎖国を解いて新たに世界の舞台に登場した「ウブな」日本は、いきなり西欧の強欲な植民地支配の脅威に晒されたのだった。日本は、他のアジア諸国がすでに経験していた欧米列強の露骨な干渉を回避し、国家の独立を保つには、科学、工学、土木の習得、軍事力、政治力において、欧米諸国にいち早く追いつくこと、総じて国家の近代化が焦眉の急であった。

西欧知識をいち早く吸収するのに、明治政府は二つの政策を実行した。一つは、外国人の教師、専門家を日本への招聘することであり、もう一つは日本人留学生を海外に送ることだった。これは、五箇条の御誓文の第五条、「知識ヲ世界ニ求メ皇基ヲ振興起スヘシ」の具体化である。前者の政策によって日本にやって来た外国人は、「オヤトイ」と呼ばれ、1968年から1900年の間、実に1万人に迫る外国人が、明治政府に雇われた。1870年から1885年までの、官庁別雇い入れ数を見ると、工部省が全体の60パーセントを占め、明治政府がいかに西欧近代技術の習得に熱心であったかがわかる。オヤトイへの給料は、国家予算の3分の1にも迫り、高給オヤトイの中には、その年収が首相を上回るものもあり、新政府の財政を圧迫した。政府は「自前」の技術者、教師を揃えるべき、海外留学を奨励した。明治初期、1867年から74年までのみで、約600名が欧米に留学しているが、圧倒的多数が、当時の技術先進国アメリカ、イギリスに留学している。

私の心に引っかかっていた留学生が、日下部太郎であると確信したのは、大学院の授業で明治の近代化を扱ったおり、W.E. グリフィスが書いた『皇国』を読んだ時だった。グリフィスは後東京大学の前身で教えることになるが、当初、越前藩のオヤトイ教師として来日し、藩校明道館で教鞭をとった。越前での経験を記した一節に、私は次の文章を見つけた。

「私はかれ（父親）に令息（太郎）が、ラトガース大学で首席であり、そのためにファイ・ベータ・カッパの会

員に選ばれたことを告げ、その印である金の鍵を渡した。」

ラトガース大学はニュージャージー州ブランズウィックにあるグリフィスの母校であり、横井小楠の甥を始め、幕末以降多くの日本人が留学した大学である。オランダ改革派教会が創設したこの大学へ日本人留学生を手引きしたのは、日本で



日下部太郎

布教した改革派牧師のフルベッキである。またファイ・ベータ・カッパは、「学問は人生の案内書」の意味のギリシャ語の頭文字を取った各大学の最優等生を会員とするクラブで、この会員であることは、現在も必ず履歴書に記される極めて名誉なことである。もちろん日本人としては、初の受賞者であった。

2004年から一年の研究休暇の一時期、私はラトガース大学のアーカイブに隠って、日下部太郎の事蹟を調べた。私はアメリカ先住民を専門とする研究者であり、史学のディシプリンには乏しいが、長年の気掛かりを解消すると同時に、日下部太郎の存在を明らかにすることによって、志半ばに早世した彼の無念が、少しでも晴らせたらと思ったのだ。近代日本を作ったのは、光のあたる新帰朝者ばかりでなく、日下部太郎のような無私の精神に貫かれた無名士たちの純粋な魂があったと思うからだ。

太郎は、1845年6月6日越前藩士八木寿の長男として、福井に誕生している。寿の禄高は150石、自宅は福井城のお堀りにほど近い江戸町、いわゆる中級武士であった。太郎の本名は八木八十八（やそはち）というが、渡航に際して改名している。幼い頃から秀才の誉が高く、藩校明道館に学び、14歳の折には成績優秀により、藩主松平春嶽より書籍一部、墨二挺の褒賞をもらっている。太郎はだが、青白い秀才ではなかった。明道館でともに学んだ大野淑人の回想に寄れば、太郎はいたずら者で、堀から落ちて足を負傷したり、鮎釣りを好んだりした活動家で、唯ただ書物を読み耽る腐儒の徒ではなかった。

1864年、藩一の秀才として長崎済美館に遊学し、フルベッキの教えを受けている。1866年に江戸幕府が海

外渡航禁止を解除すると、翌67年には、越前藩最初の留学生として長崎を出帆した。日本外国事務局発行の海外旅行免許状には、「長崎第4号」とあり、最初期の留学生であることがわかる。8月12日にニューヨークに到着し、秋にはラトガース大学予科のグラマースクールに入学し、1級上のグリフィスに語学などの個人教授を受けた。1868年2学期より、ラトガース大学 Scientific School (現在の学部相当) の土木・機械コースに入学した。

もうないと思われていたそこでの太郎の成績原簿を、ラトガース大学の古文書館で見つけたとき、私は、太郎が私の熱意に応じてくれたような気がした。そして、その成績原簿に瞠目した。化学、幾何学、応用数学の100点を始めに、90点以下の科目は一つもなく、専門外の歴史学、フランス語も100点、道德哲学の99点など、唖然とするほどの秀才ぶりなのである。もちろん学年トップである。同時に、江藤淳の「勉強死」という表現に納得がいった。母国語を話すアメリカ人でさえ達成できないような成績を、渡米わずか2年で残したのである。

1870年4月13日、卒業の2ヶ月前に太郎は亡くなった。結核が疑われるが、死亡記録には、消耗死とある。全米秀才クラブ、ファイ・ベータ・カッパのラトガース大学支部は、すでに亡き太郎を会員に推挙する異例の動議を行い、全会一致で承認された。

葬儀は4月15日 午後3時から第2改革派教会で執り行われた。大学は休講となり、悲しみの半旗が掲げられた。教会は学生や教師らラトガース大学関係者、その他太郎を知る町の人々など、100人を越える会葬者で埋まった。司祭ランクロフトの祈りに始まり、弔辞は、キャンベル学長が捧げた。一学生の葬儀に学長が出席し、しかも弔辞を読むのは異例のことである。キャンベルは、死の床までキリスト教への改宗を拒み、「武士」のまま旅立った日下部に敬意を表した。ラトガース大学新聞「ターガム」は、日下部を悼む記事を一面全面に掲載し、賞賛を惜しなかった。

「日下部はあまりに貪欲に知識を吸収するために、自分の肉体を犠牲にした。・・・知性だけでなく、彼の洗練されたマナーと、品位溢れる親切心は、クラスメートたちの「紳士」のモデルだった。日下部は、彼の祖国の文化の最良の精華であった。」

ニューブランズウィックのかつては一等地であったウィロー・グローブ墓地に、今も太郎は眠る。その墓所は、小弁務士として米国に赴任していた森有礼が、明治政府

とかけあい購入させたものだ。森も薩摩藩遣英留学生時代の自分の姿を、太郎に重ねたにちがいない。

付記

Fernanda Perrone 先生は、阿部先生の御原稿にある日下部太郎をはじめ、大学に近い Willow Grove Cemetery の The Japanese Section (ウィーロ・グローブ墓地日本地区) に埋葬されている人びとについて、メモを配布された。同墓地には、慶應義塾塾長を務め、最後の中津藩主奥平昌邁とともに渡米し、日下部同様客死した小幡仁三郎も含まれている。彼に大きな期待を寄せていた福沢は、その死を嘆き「小幡仁三郎君記念碑誌稿」(『福沢諭吉全集』第21巻、岩波書店、1971年)を記している。Fernanda Perrone 先生のメモには、いくつかの情報の齟齬があって、今後交流を続けながら小幡仁三郎の足跡についても調査することを話し合った。(西沢直子)

*なお当日の Fernanda Perrone 氏、高木不二氏、容應英氏、崔徳壽氏の演題は以下の通りです。ご報告の詳しい内容は、『近代日本研究』第34号 pp.417～470をご参照ください。

Fernanda Perrone Invisible Network: Japanese Students at Rutgers during the Early Meiji Period / 高木不二
黎明期の日本人米国留学生一横井左平太と津田静一
／容應英 中国清末における留米学生派遣の断絶と連続：容閔と唐国安の事例をふまえて / 崔徳壽 近代朝鮮人のアメリカ留学



特別展「釈宗演と近代日本」 開催に当たって

都 倉 武 之

慶應義塾福沢研究センターでは、臨済宗大本山円覚寺との共催で特別展「釈宗演と近代日本―若き禅僧、世界を駆ける」を開催する。慶應義塾出身で臨済宗円覚寺派管長などを歴任し、明治大正期を代表する仏教者として知られる釈宗演は、大正8(1919)年11月1日に没したが、本年秋には円覚寺において100回忌に当たる100年遠諱法要が行われる。また来年には、大用国師の200年遠諱法要も控えている。これらの盛儀を見据え、同派では円覚寺に伝わる至宝を展示する美術展の企画を進めていたが、こんにちでは余りその名を知られていない釈宗演を広く一般に紹介する機会も設けたいとの考えから、当センターに展覧会開催の相談をいただいたものである。

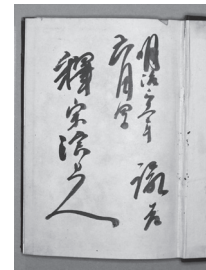
慶應義塾出身者(明治29年特選塾員)としての釈宗演は、慶應義塾の編纂した『福沢諭吉事典』でも人物項目として取り上げられており、特徴ある福沢門下生の一人とされているが、福沢研究や慶應義塾史研究においては、俎上に上がることが少なかった人物である。その原因は、福沢自身が一般には無神論者と捉えられ、福沢研究の中で宗教の問題に余り関心が向けられてこなかったこと、近年白井亮子や土屋博政などによってキリスト教と福沢の関係が徐々に明らかにされ、それに対する「仏教」という議論の構図においては、福沢家の宗旨である浄土真宗に注意が集中したことなどにあるであろう。筆者自身、明治13年に発生したハリストス正教会と仏教徒の訴訟事件(天主教徒自葬事件)をめぐる福沢及び門下生、そして関係する宗教者たちの動きを論じたことがあるが、もっぱら真宗が調査対象となった。福沢に関係が深い真宗関係者には、渥美契縁、篠原順明、七里恒順、白山謙致、菅了法、寺田福寿など塾内外の顔ぶれが知られるが、他の宗派で知られている慶應出身者は、釈宗演のほかに、土宜法龍(高野山真言宗管長)くらいであろう。福沢との接点はあまり知られていないが、忽滑谷快天(駒澤大学初代学長)などもいる。

本展覧会では、すでに今北洪川の下で修行を終え、住職の地位を得ていた釈宗演の生涯が、26歳での慶應義塾入学を皮切りに、世界へと大きく開かれていく若き日々を中心に、その生涯を紹介する。ZENを世界に紹介し、鈴木大拙の師であることなどからも関心が集まるであろうが、福沢との関係では、慶應義塾入学時に寺に残した置き手紙、「三田の書生が天竺の羅漢になった」という意味のことを記すセイロン留学中の書簡、シカゴで開催された第1回万国宗教会議の際、福沢が宗演と土宜法龍に与えた資金の記録と英文紹介状、福沢の還暦と死去に際して送られた宗演の漢詩などを展示する。

同時に彼は日露戦争の戦場に従軍布教師として赴き、



洋装の釈宗演(1905年) 釈宗演蔵書の『福翁百話』から
発見された福沢の献辞(1897年)



日露戦争で戦死者の遺体前で読経する釈宗演
(部分・右から2人目・1904年)

その惨状を目にした。愛弟子の植村宗光は、戦地から「平和への渴望」を鈴木大拙に書き送りながらも無念の戦死を遂げた。円覚寺は北条時宗の開基であり、元寇の戦没者慰霊が開山の目的の一つともされ、開戦後まもなく北条時宗を従一位に叙することが政府から発表されている。当センターで5年来取り組んでいる戦争調査の文脈からも「近代」を考える機会としたいと考えている。

宗演が従来の枠組みを自ら打ち破った行動と、提示した新たな世界観、そしてそれをめぐる様々な葛藤が、福沢研究や近代史研究に新たな視座を与えることが出来ればと考えている。

開催の概要は下記の通りである。

会期：2018年6月4日(月)～8月6日(月)

会場：慶應義塾大学三田キャンパス

[第1会場] 図書館展示室(日曜祝日休館)
9:00～18:20(土曜16:50)

[第2会場] アート・スペース(土日祝休館、
6/23、7/21は開館) 10:00～17:00

※関連イベントとして横田南嶺氏(臨済宗大本山円覚寺派管長)と馬場紀寿氏(東京大学東洋文化研究所准教授)の特別対談、ノグチ・ルームでの坐禅ワークショップ・ミニレクチャー、ギャラリートークなどが予定されている。詳細は、当センター HP。



福沢諭吉と韓国近代文学者、崔南善と李光洙

韓国放送大学統合人文学研究所
学術研究教授

宋 恵 敬

韓国近代文学において、「最初」という修飾語が付けられる二人の文学者がいる。韓国最初の新体詩を書いた崔南善と、韓国最初の近代長編小説を書いた李光洙である。1908年に総合雑誌『少年』創刊号に掲載された崔南善(1890～1957)の「海から少年へ(해에게서 소년에게)」は、新しいリズムを作り上げたということで韓国最初の新体詩として評価されている。また李光洙(1892～1950)は、『毎日新報』に「無情(무정)」という小説を連載(1917年1月1日～6月14日)した。民族の近代化と啓蒙意識を高める「無情」は、近代的人物の創造やその深い心理描写、また口語体の使用などによって、韓国最初の近代的長編小説として評価されている。韓国近代文学の先駆者と言われるこの二人の文学者は、福沢諭吉と一度も会ってはいない。しかし、彼らは自らの著作において、福沢諭吉について語っている。二人の文学者は福沢諭吉をどう認識し、どのように語ったのか。

崔南善と李光洙は、ともに2度日本へ留学する。崔南善は、1904年に大韓帝国皇室派遣の留学生として選抜され、東京府立第一中学校に入学、1906年16歳の時に再び渡日、早稲田大学の高等師範部地理歴史科に学んだ。一方李光洙は、1905年に一進会^{*1}の留学生に選ばれ、日本の大成尋常中学校を経て、明治学院在学中に小説の執筆を始めた。1915年日本に再び留学し、早稲田大学に入学する。二人とも最初の留学時には、すでに福沢は歿していたが、しかし彼らはこの2度の留学を通じて、福沢諭吉を知った。

太平洋戦争さなかの1944年、崔南善と李光洙は、朝鮮学生の特例支援兵支援激励のために東京を訪問する(「東京対談」『朝鮮画報』1944年1月)。その際開かれた対談会で、司会者の馬海松(児童文学作家兼出版者)は、彼らに新文芸創始者としての懐古談を求めた。それに応じて崔南善は「日本文化に接して最も衝撃を受けたのは福沢諭吉」であり、「日本文化の進歩の中において福沢諭吉の功績は最も大きい」と語った。また自分の



崔南善^{*2}

散文体は福沢諭吉を真似したもので、それを使って最初の短篇を書いたと述べ、彼の新しい文体への挑戦の背景には福沢諭吉がいたことを明らかにしている。このように「東京対談」では、韓国近代文学の文体面への福沢諭吉の影響が語られたが、しかし福沢諭吉からの影響は、文学面に限られたものではなかった。

1906年2度目の留学から帰国した崔南善は、出版社「新文館」を起こし、雑誌『少年』を刊行する。その『少年』では1909年2月から8回にわたり「現代少年の新呼吸」(第2回からタイトルが「新時代青年の深呼吸」に変わる)が連載された。アメリカのワシントンやフランクリンなど、東西の思想家、教育家、政治家の生涯や座右銘などが紹介され、新しい時代を生きていく朝鮮の青年が教訓とすることを勧めている。これは国家的危機状況のなかで、朝鮮青年達を奮い立たせるための企画であった。

第1回目は、「日本故福沢諭吉著」の「修身要領」が韓国語で翻訳掲載された。翻訳の責任は編集人の責にあると明言し、また「修身要領」が編纂された意図については「今日の士女が今日の社会に処してどのような道にとるか、(中略)日新する社会にはまたその社会に適当な教訓が必要である。(それが)この処世要領のような法を新定する所以である」と紹介した。また、連載の2回目では、次回の予告文のなかに「前次福沢氏の「処世要領」で独立自尊を学んだ我々」と語って、「修身要領」の主題が独立自尊であることを強調している。『少年』への掲載をきっかけに、以後「修身要領」は、独立や愛国思想の昂揚を目的とする畿湖興学会の機関紙である『畿湖興学会月報』に、その翻訳が掲載される(1909年6月25日)。またサンフランシスコを本拠地にしていた『新韓民報』の新年企画の「新年の新文見」には、3回(1914年1月8日・15日・22日)にわたり掲載された。同誌ではそれが「日本の自強不屈の大和精神を養ってきた日本学者福沢諭吉」(1914年1月8日)の著作であると紹介している。崔南善によって翻訳された「修身要領」は、独立を求める朝鮮の青年達に向けて、雑誌や新聞などへ拡散していった。

一方李光洙は2度目の留学から帰ってきて、日本が教育によって文明開化を成し遂げたと考え、『毎日新報』の「東京雑信」(1916年9月27日～11月9日)で、文明開化のモデルとしての東京を語っている。その中で彼は、福沢諭吉の墓を訪問してきた感想を「福沢諭吉の墓を拝む」というタイトルで掲載する。李光洙は福沢諭吉



李光洙*3

の業績を次のように称えている。すなわち「彼は教育が新しい国家の基礎であることを自覚し、慶應義塾を拡大して政治、経済、法律、文学などを教えた。また福沢は社会に新智識を普及するため『時事新報』という大新聞を創刊し、かつ演説を盛んにして自ら旧習を改革して新文明の標本」となった。また李は「私も

将来朝鮮文化に微力を報するため、先生の徳を欽慕して来拝した」と訪問の目的を明らかにしている。それは李光洙が「国民一般に新文明知識を普及」して「聡明な青年に新文明の思想や知識を理解」させたいという自らの理想を、福沢諭吉を引き合いにして述べたものであった。従って当時朝鮮の知識人社会の彼に対する評価も「儒教思想に反旗を挙げた最も有力な一人」として「朝鮮の社会的状態、思想及び道徳に熱烈な反対者」という肯定的な認識と共に、「日本の福沢諭吉以上にはならなかった」（『開闢』1925年1月1日）と福沢諭吉とも比較されて論じられるようになった。

韓国「最初」の新体詩を書いた崔南善と韓国「最初」の近代長編小説を書いた李光洙は、日本への留学を通して

福沢諭吉を知り、彼の著作や思想を朝鮮の独立を求める青年に対して拵げていった。しかし、彼らに対する韓国での民族的評価はよくない。日本の植民地政策が日増しに厳しくなるにつれて、朝鮮国内における彼らの活動も変質し、だんだんと反民族的なものになっていったからである。従って、現在彼らの反民族的な活動に対する韓国社会での評価は、妥当であると言える。とはいえ、若き時代の二人が福沢諭吉を手本にして、朝鮮社会の未来のために寄与したいと願っていた純粋な熱情までも葬り去ってはいけないと思う。

*1 1904年～1910年の間、宋秉峻の維新会を改称した一進会に李容九の進歩会を吸収統合した親日団体。1904年8月19日、旧独立協会の関連者たちを中心に維新会が組織され、同20日、一進会と改名した。一進会の趣旨は維新会より現実的・具体的に志向を明らかにしている。それは皇室尊重、国家基礎強固、人民の生命財産保護、政府の政治改選実施、軍政財政の整理などである。（韓国民族文化大百科、韓国学中央研究院）

*2 尹姫珍著、『韓国の教科書に出てくる人物コリア史3 近現代』（彩流社、2013年）P.132

*3 波多野節子著、『李光洙－韓国近代文学の祖と「親日」の烙印』（中央公論新社、2015年）P. iii

新収資料紹介

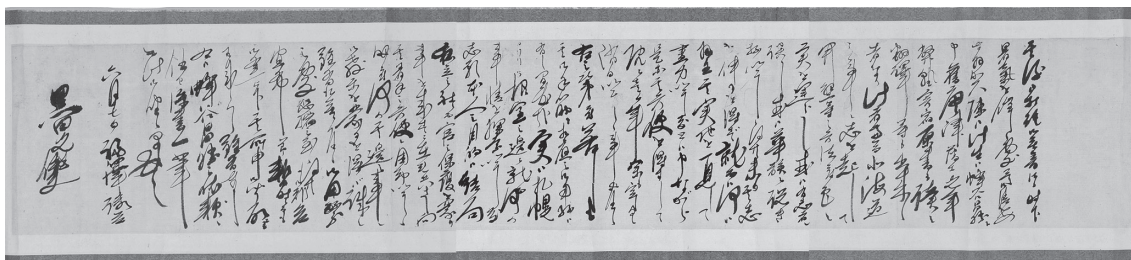
平成29年11月から平成30年3月までの間に、福沢研究センターに収蔵された主な資料を紹介します。多くの方々から貴重な資料をいただきながら、すべての資料をご紹介することができず申し訳ありません。（物故者敬称略）

■ 黒田清隆宛福沢諭吉書簡 明治14（1881）年6月7日付 1巻

【購入】

慶應義塾で学んだ蜂谷昌勝が、北海道根室周辺で何か事業を起こしたいと考えているので、面談をしてほしいと依頼したもの。蜂谷は旧唐津藩士で明治12年に入塾、同年第2期まで「慶應義塾勤惰表」に名前がある。「交詢社姓名録」（『交詢雑誌』）によれば、明治16年は水産会員で、17年から26年は福岡や佐賀で教員をしている。

福沢は蜂谷を佐野常民にも紹介し、その手紙は『福沢諭吉全集』第17巻（岩波書店、1971年）では明治12、3年頃かと推定されているが、『福沢諭吉書簡集』（全9巻、岩波書店、2001～3年）では決め手を欠くとして、年末詳で第9巻に収録されている。今回黒田宛の紹介状が見つかり、発信年は開拓使官有物払下げ事件のことを考えると、まだ黒田が北海道長官を務め、文中から蜂谷が北海道に職を求めて1年ほどがたっていることがわかるので、明治14年と推定される。

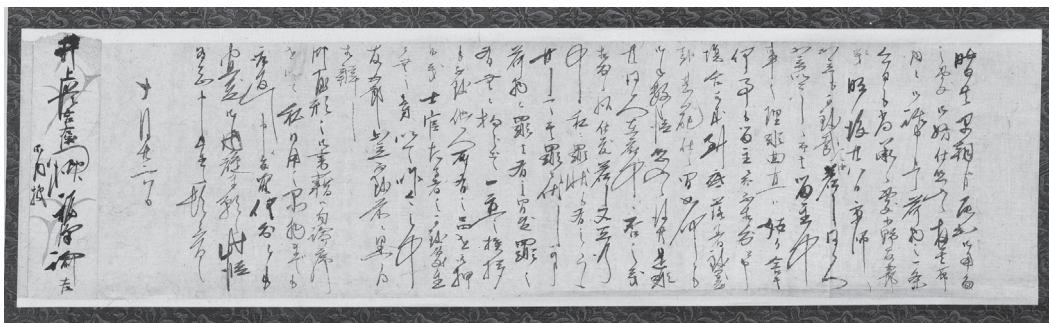


■ 井上従吾右衛門宛福沢諭吉書簡 慶応3(1867)年10月26日付 1幅

【購入】

宛先の井上従吾右衛門は和歌山藩の公用人で、同藩からの依頼で福沢が2度目の渡米中にニューヨークのアップルトン書店で購入してきた図書の引き渡しについて、周旋を願ったもの。渡米中、幕府の軍艦受取使節であった小野友五郎との間に軋轢を生じてしまい、帰国後荷物が差し押さえられてしまった。福沢は小野友五郎が勘定奉行並御勝手方(兵庫開港御用取扱)として大坂に赴任することを聞き、なんとか小野の在府中に決着できるよう周旋を依頼したと思われる。

この手紙は前掲『福沢諭吉書簡集』第1巻に掲載されているが、編纂の際には原本の所在がわからず、校訂できなかった。今回それが可能となった。また慶応期以前の書簡は推定をあわせても、現在のところまだ58通しか判明しておらず、その点でも貴重である。数少ない幕末期の手紙の封筒には、模様のある美しいものが見受けられるが、この手紙も一部が浅黄色で全体的に模様のある封筒が使われている。



■ 益田英次宛福沢諭吉書簡 明治22, 23年頃7月18日付

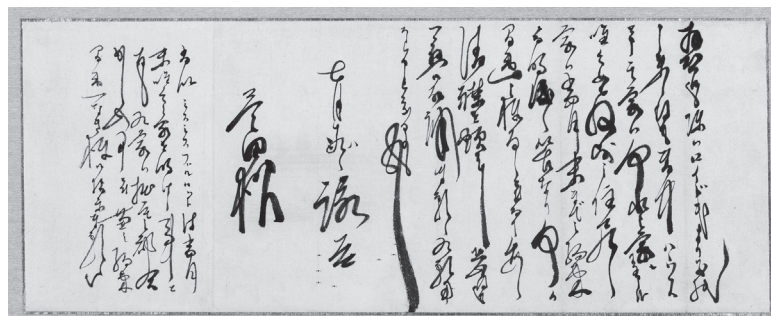
【Mark Webster 氏寄贈】

イギリス国教会の宣教師で、慶應義塾の教員でもあったアーサー・ロイドからの「ハウス」に関する問い合わせに対して、現在「女教師」「ミスシスフハルロット」が居住している家なら、今月末までに明け渡しの予定であることを告げ、取り調べを依頼したもの。

手紙の中に出てくる「ミスシスフハルロット」Marie von Fallot は、『慶應義塾五十年史』(1907年、慶應義塾)掲載の、明治15, 6年から20年頃迄とされる教職員のリストに名前があり、慶應義塾初の女性教師として英語を教えていた人物である。当時外国人は定められた居留地に住むことが義務づけられていたが、雇用主から申請があればその限りではなく、明治19年12月24日付で慶應義塾から東京府知事高崎五六に宛て任用願が提出されたため、三田構内に住んでいた。この書簡のころには、上記のほかにも女性達にも、「大人之部」「子供之部」を設け、英語やピアノを教えていた。

任用願に添付されたと思われる履歴書によれば、Marie von Fallot は英国の生まれで、16歳のときにフランス語学習のため1年間フランスに留学し、次にドイツ語を学ぶために渡独、その後にドイツ人の技師と結婚してドイツで過ごしていた。生年は書かれていないが、任用時に37歳であった。明治26年にこの書簡に出てくる慶應義塾大学部文科学科の主任教師の「ロイド」と再婚している。

この手紙は益田氏の子孫である旧姓益田道子さんが保管され、Webster氏とご結婚後もイギリスの自宅に掲げられていた。道子氏が御遺言で当塾への寄贈を Mark Webster 氏に託され、同氏がイギリスからの長旅を大切に運んでくださり、このほど義塾に寄贈された。これまで福沢研究センターでは原本の所在がわからず、『福沢諭吉著作集』でも校訂ができなかったが、それが叶うことになった。



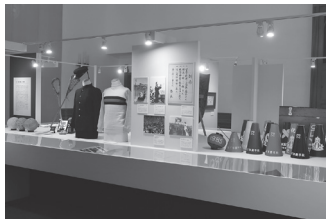
❖ 主な動き

主な動き

■ 展覧会の開催

2017年は体育会創立125年という節目の年であった。日吉キャンパスでは4月15日～24日にかけて来往舎1階ギャラリーにおいて体育会による記念展覧会「学生スポーツの未来を担う「次世代への継承」(福沢研究センター協力)が開催され、現在の43部が紹介された。

秋には三田キャンパスにおいて、体育会と福沢研究センターの共催(アート・センター協力)により、体育会の歴史を振り返る展覧会「近代日本と慶應スポーツ—体育の目的を忘るゝ勿れ—」が開催された。期間は11月28日から12月13日までと短かったが、東館8階ホールを特設会場に模様替えて多岐にわたる歴史的資料を展示、連日多数の入場者で賑わった。この特別展企画は都倉武之(福沢研究センター准教授)と山内慶太(看護医療学部教授・センター所員)が担った。展示は11の章で構成され、さらに特設コーナーや映像・音声のブースが設けられた。主な展示品は以下のとおり。



第1章 福沢諭吉の運動論と健康 15点

・福沢使用の居合刀、『福翁自伝』原稿

第2章 ブランコから体育会へ 15点

・端艇部優勝旗、レッド倶楽部ユニフォーム

第3章 スポーツの開拓 18点

・楨有恒愛用ピッケル、早大野球部からの挑戦状と返事

第4章 「若き血」の時代 21点

・水原茂着用野球部ユニフォーム、ロサンゼルス五輪金メダル(水泳 宮崎康二)、ベルリン五輪「友情のメダル」(陸上棒高跳 西田修平・大江季雄)

第5章 戦時のスポーツと学生 12点

・水泳部片山崇写真立て、硫黄島からの手紙(河石達吾)

第6章 学生スポーツの復活 11点

・GHQに提出された弓術部復活嘆願書草稿

第7章 ふたたび世界へ 16点

・ヘルシンキ五輪銀メダル(レスリング 北野祐秀)、ローマ五輪金メダル(体操 小野喬)

第8章 小泉信三とスポーツ 10点

・「練習ハ不可能ヲ可能ニス」書額、「文武双全」色紙

新9章 新たな価値を求めて 12点

・前田祐吉野球部監督ノート、リオ五輪リレー決勝バトン

第10章 国を超える交流 15点

・全日本バレーボールチームのサインボール

第11章 スポーツと学生文化 15点

・堀内敬三・藤山一郎自筆楽譜、應援指導部セーター
トロフィーコーナー 7点

・第23回日本ラグビーフットボール選手権優勝盾
映像音声 3点

・復活せる早慶野球仕合(大正14年)

■ その他展覧会への協力

下記の展覧会に資料を貸し出した。

・港区平和展(高輪区民センター)

2017年7月29日～8月13日

・中野松三郎関係資料展(中津市福沢記念館)

2017年8月1日～2018年1月31日

・「20世紀の総合芸術家 イサム・ノグチー 彫刻から身体・庭へ」展(大分県立美術館)

2017年11月17日～2018年1月21日

・「『解体新書』と前野良沢」展(中津市大江医家資料館)

2017年12月6日～2018年2月12日

・「福沢諭吉と西南戦争～西郷隆盛と増田宗太郎をめぐって～」(中津市福沢記念館)

2018年1月27日～3月21日

■ 顧問・所員の活動

大阪でのセンター講座とともに、以下にあげるような行事にも顧問・所員の協力を得た。

名誉教授・センター顧問 小室正紀：中津市主催福沢諭吉記念第56回全国高等学校弁論大会審査員(11月24日)

看護医療学部教授・センター所員 山内慶太：福沢先生118回忌法要時記念講演会で講演：「福沢諭吉にとっての明治元年(慶應4年)―明治150年に際して―」(2月3日)

なお、センター専任所員による講演・講義は諸記録(P.11)にあるとおり。

■ 国際交流

昨年8月にセンターと部局間協定を結んだ韓国啓明大学から1月22日に呉允禎(オ ユンジョン) 准教授がセンターを訪れた。また、1月25日から2月1日まで韓国梨花女子大学大学院史学科からイヒョンジュ研究教授、学生5名を受入れた。

■ 『近代日本研究』の刊行

2月28日に第34巻を刊行した。特集として「慶應義塾大学医学部設置100年」を組んだ。また、特集以外に、昨年10月20日および21日の2日間にわたって開催されたシンポジウム「東アジアの近代とアメリカ留学」の講演録を収録している。

■ 諸会議

- *平成29年度執行委員会(11月1日、1月26日、2月27日)
- *小泉基金運営委員会(1月18日)
- *平成29年度第2回運営委員会(11月9日)
- *平成29年度第3回運営委員会(3月7日)
- *平成29年度第2回福沢研究センター会議(1月25日)
- *『近代日本研究』第35巻編集委員会(3月29日)
- *『慶應義塾150年史資料集』第3巻編集委員会(3月22日)

■ 人事

〈所 員〉 退任 クナウプ、ハンス・ヨアヒム(経済学部教授)
～3月31日

〈訪問准教授〉 白玉敬(梨花女子大学准教授)

1月1日～2019年2月28日

〈訪問准教授〉 李泰勲(延世大学准教授) 2月1日～2月28日

〈事務局〉 新任 吉野麻衣子(派遣職員) 11月1日

新任 中田芳得(派遣職員) 1月9日～3月31日

退任 渋谷彩佳(非常勤嘱託) ～3月31日

■ 主な来住

- *齋藤静代氏、齋藤久男氏旧蔵資料を寄贈(10月5日)
- *湯野川瑞比古氏、湯野川太郎氏旧蔵資料を寄贈(10月10日)
- *早大大学史資料センター山本剛氏、資料閲覧(10月17日)
- *三宅正夫氏、海軍技術科関係資料を寄贈(10月19日)
- *山田奈生子氏、尊父前川彌平氏旧蔵資料を寄贈(10月20日)
- *Mark Webster氏、益田英次氏宛福沢論吉書簡を寄贈(11月2日)
- *塾員野崎誠一郎氏、祖父西村政氏関係資料を寄贈(11月6日)
- *法政大学笹川ゼミ来訪(11月16日)
- *塾員坂戸宏太氏、祖父坂戸直輝氏旧蔵資料を寄贈(11月20日)
- *塾員山名愛三氏、山名次郎氏関係資料を寄贈(11月21日)
- *河西宏和氏、秋山桂子氏、塾員秋山源兵衛氏関係資料を寄贈(11月25日、12月1日)
- *ヴィータウタス・マグナス大学(リトアニア)アウレリウス・ジーカス准教授、資料閲覧と撮影のため来訪(11月29日)
- *中津市社会教育課文化財室曾我俊裕氏来訪(11月30日)
- *Minako Debergh氏、資料閲覧(12月5日)
- *是松忍氏、福沢書幅を寄贈(12月5日)
- *塾員坂井亮子氏、羽石稀一氏関係資料を寄贈(12月7日)
- *NHK 大分放送局取材対応(12月12日)
- *文学部教授遠山公一氏、衣裳人形を寄贈(12月14日)
- *塾員佐藤直司氏、東京オリンピック資料を寄贈(12月14日)
- *塾員岩崎洋三氏、塾員渡辺靖國氏、塾員小幡一雄氏、端艇部関係資料を寄贈(12月14日)
- *塾員伊藤三郎氏、小泉信三遺品の帽子を寄贈(12月18日)
- *塾員鶴間象治朗氏、東京オリンピック資料を寄贈(12月25日)
- *塾員水野善弘氏、登高会会報を寄贈(1月15日)
- *塾員森真理氏、尊父家長昂一氏旧蔵資料を寄贈(1月22日)
- *大分県立歴史博物館村上博秋氏来訪(1月23日)
- *塾員濱田洪一氏、祖父濱田長策氏旧蔵資料を寄贈(1月23日)
- *中津市長奥塚正典氏、教育委員会教育長廣畑功氏来訪(1月25日)
- *朝日新聞川見能人氏来訪(2月6日)
- *塾員山岸成昭氏、小泉信三遺品十字架を寄贈(2月15日)
- *塾員緒方容造氏、尊父緒方惟吉氏旧蔵資料を寄贈(2月19日)
- *NHK Eテレ取材対応(2月20日、3月1日)
- *中外日報取材対応(2月23日)
- *大分県立先哲史料館館長大津祐司氏、櫻井成昭氏来訪(2月27日、3月16日)
- *中野二誠会会長太郎良讓二氏来訪、資料に関する覚書手交(2月28日)
- *関西学院大学クリス・ベルアド氏来訪(3月9日)
- *塾員宮崎啓助氏、聞き取り調査、写真アルバムを寄贈(3月9日)
- *坂井悠治氏来訪(3月12日)
- *塾員阿部慎蔵氏、小泉信三関係資料を寄贈(3月14日)

*読売新聞取材対応(3月14日)

*塾員増田時枝氏、資料を寄贈(3月16日、22日)

■ 出張・見学

- *都倉、北里研究所北里柴三郎記念館リニューアルに出席(10月2日)
- *西沢、すみだ女性センター(10月6日、2月7日)
- *都倉、故藤山一郎氏宅を訪問(10月7日、12月27日)
- *都倉、吾妻山荘視察のため福島(10月11日～12日)
- *竹屋、全国大学史資料協議会全国総会・研究大会のため愛知(10月11日～13日)
- *都倉、横山、資料移送のため遠山記念館を訪問(10月26日)
- *西沢、資料調査のため中津(10月25日～26日)
- *都倉、資料借用のため松平家を訪問(10月30日、12月25日返却)
- *都倉、横山、資料借用のため埼玉県川島町、鈴木家を訪問(11月4日)
- *都倉、札幌オリンピックミュージアム(11月6日、2月1日)
- *都倉、弓術部道場開、125年式典出席のため日吉(11月12日)
- *都倉、日本山岳会より資料借用(11月15日)、返却(12月25日)
- *都倉、野球殿堂博物館、早大大学史資料センター、秩父宮スポーツ博物館にて資料借用(11月16日)、返却(12月21日)
- *西沢、Andrew Gordon氏と面会のため六本木(11月14日)
- *都倉、資料調査のため舞鶴(1月28日～30日)
- *都倉、資料確認のため岡山(2月11日)
- *都倉、横山、上原家調査のため千葉県松戸市(2月13日)
- *都倉、展覧会準備のため北鎌倉(2月20日、26日～27日、3月12日、19日)
- *都倉、学生部主催「福沢先生の足跡を辿る旅—中津、長崎—」に参加(3月5日～7日)
- *井奥、福沢旧邸保存会理事会のため中津(3月22日)
- *都倉、横山、白石、資料引取のため鎌倉(3月27日)
- *西沢、福沢旧邸保存会評議員会のため中津(3月29日)

■ 講師派遣

- *西沢、福沢論吉記念文明塾で講義：「福沢論吉の近代社会論を考える」(10月14日)
- *西沢、商学部留学生の授業で講義：「福沢論吉の経済学と女性」(10月19日)
- *都倉、関西ジャーナリズム研究会で報告：「時事新報研究を巡る現状と課題」(10月27日)
- *都倉、白井厚研究会 OBOG 会で講演：「『慶應義塾と戦争』から考えること」(11月11日)
- *都倉、慶應義塾全国議員連盟で講演：「体育会の歴史にみる福沢精神と慶應らしさ」(11月17日)
- *都倉、体育会創立125年記念特別展「近代日本と慶應スポーツ」でギャラリートーク(11月30日、12月6日、8日～10日)
- *都倉、体育会創立125年記念特別展「近代日本と慶應スポーツ」記念講演会で司会：「メルボルン五輪慶應クルー秘話」(12月5日)
- *都倉、SFC 高等部学部説明会で講演：「慶應義塾と三田」(12月8日)
- *都倉、京都慶應倶楽部で講演：「歴史から見る慶應義塾と京都」(1月10日)
- *都倉、横浜初等部ご命日講話で講演：「福沢先生の散歩」(2月3日)
- *都倉、佐倉三田会・佐倉稲門会合同講演会で講演：「ライバルとしての早稲田・慶應—福沢・大隈から早慶戦へ—」(2月8日)
- *都倉、姫路慶應倶楽部で講演：「歴史の中の慶應義塾—日吉キャンパスを中心に—」(2月10日)

■ その他

- *西沢、都倉、酒井、学術資料展示施設検討委員会ワーキング・グループ(10月24日、11月28日、12月22日)
- *都倉、DMC 戦略的研究基盤形成支援事業ミーティング(11月10日、2月2日、3月22日)

スタッフ一覧

所 長	井奥 成彦	文学部教授	白井 堯子	千葉県立衛生短期大学名誉教授
副 所 長	平野 隆	商学部教授	曾野 洋	四天王寺大学教授
専任所員	西沢 直子	副所長、福沢研究センター教授	高木 不二	大妻女子大学短期大学部名誉教授
	都倉 武之	福沢研究センター准教授	西田 毅	同志社大学名誉教授
所 員	池田 幸弘	経済学部教授	平石 直昭	東京大学名誉教授
(兼運営委員)	岩谷 十郎	法学部教授	田中 康雄	元群馬県立文書館館長
	澤田 達男	理工学部教授	平山 洋	静岡県立大学助教
	武林 亨	医学部教授	藤原 亮一	田園調布学園大学教授
	林 温	文学部教授	前坊 洋	
	山内 慶太	看護医療学部教授	松沢 弘陽	
	米山 光儀	教職課程センター教授	松田宏一郎	立教大学教授
所 員	上野 大輔	文学部准教授	宮村 治雄	
	梅津 光弘	商学部准教授	森川 英正	
	大久保健晴	法学部准教授	山田 央子	青山学院大学教授
	大久保忠宗	普通部教諭	林 宗元	韓国関東大学校名誉教授
	太田 昭子	法学部教授	Craig, Albert	ハーバード大学名誉教授
	大塚 彰	志木高等学校教諭	Saucier, Marion	フランス国立東洋言語文化大学教授
	小川原正道	法学部教授	Nguyen thi Hanh Thuc	Hochiminh City University of Technology
	加藤 三明	幼稚舎教諭	Ballhatchet, Helen	慶應義塾大学名誉教授
	Knaup, Hans-Joachim	経済学部教授		
	斎藤 秀彦	横浜初等部教諭		
	末木 孝典	高等学校教諭	研究嘱託	巫 碧秀
	馬場 国博	湘南藤沢中・高教諭		石井寿美世
	宮内 環	経済学部准教授		吉岡 拓
	Millan Martin, Alberto	経済学部専任講師		堀 和孝
	結城 大佑	ニューヨーク学院教諭		山根 秋乃
				柄越 祥子
				大庭 裕介
				石田 幸生
				重田 麻紀
顧 問	岩崎 弘	元幼稚舎教諭		
	小泉 仰	名誉教授		
	小室 正紀	同		
	坂井 達朗	同		
	寺崎 修	同		
	松崎 欣一	名誉教諭	事 務 局	酒井 明夫 事務長
				竹屋 早月 主 務
				池ヶ谷麻衣 事務嘱託
				高田真規子 同
客員所員	安西 敏三	甲南大学名誉教授		中田 芳得 派遣職員
	飯田 泰三	法政大学名誉教授		渋沢 彩佳 非常勤嘱託
	區 建英	新潟国際情報大学教授		加藤 学陽 同
	片岡 豊	白鷗大学教授		
	我部 政男	山梨学院大学名誉教授		
	川崎 勝			
	佐藤 正幸	山梨大学名誉教授		

他に、『慶應義塾150年史資料集』調査員、10名
(3月31日現在)

慶應義塾福沢研究センター通信 第28号

Newsletter of
Fukuzawa Memorial Center for
Modern Japanese Studies,
Keio University

発行日 2018年4月30日 (年2回刊)
編 集 慶應義塾福沢研究センター
発 行
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
電 話 03-5427-1604
<http://www.fmc.keio.ac.jp/>
印 刷 (有) 梅沢印刷所